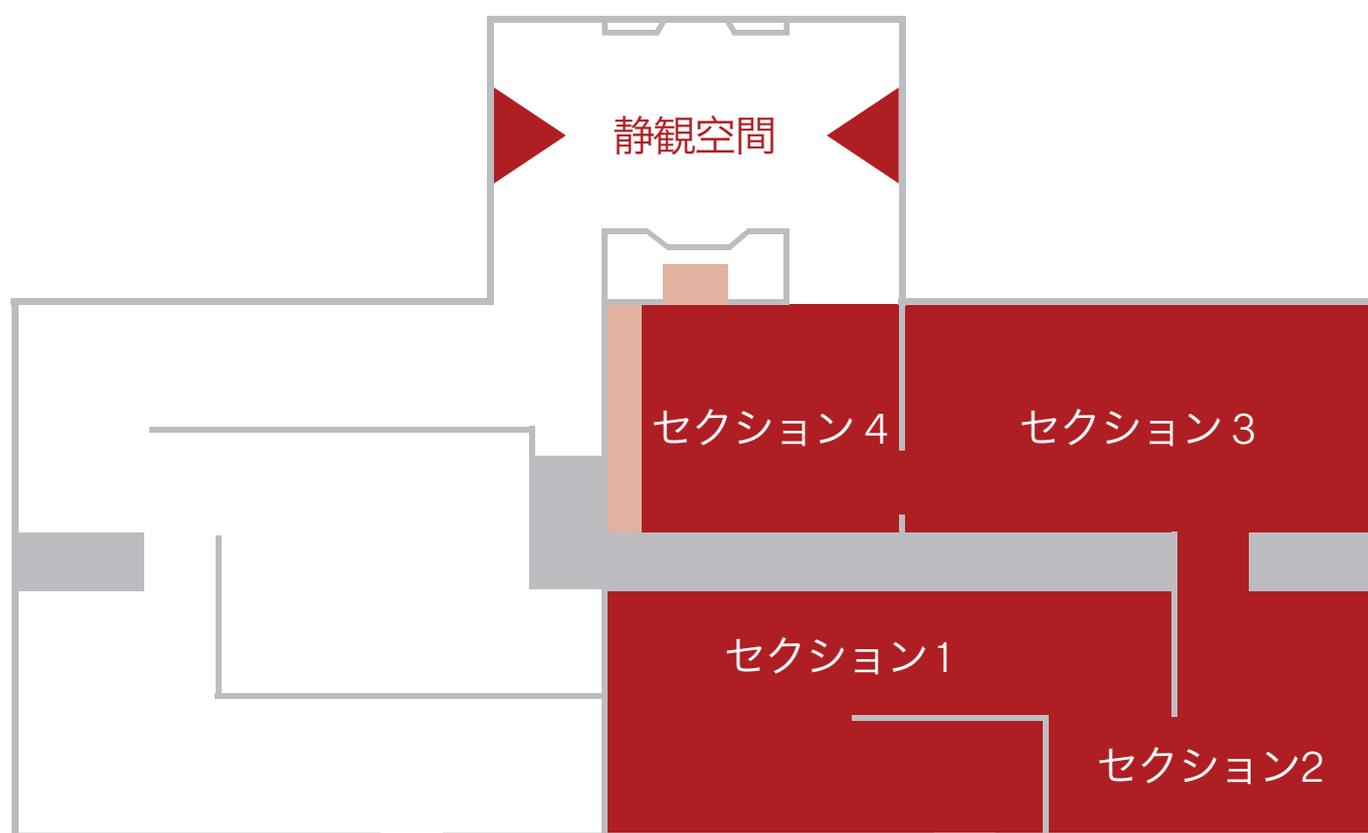


Life IN EDO



ギャラリーのフロアマップ

セクション1

旅行

初代歌川豊国 富士額花の行列 1810年頃

生え際が富士山のように美しい台形を描くことから名づけられた富士額。現代の美的価値観ではそうでもないようだが、その昔は美人の象徴だった。そんな富士額の女性たちの一団が粛々と進む。画中のそこここに記された「寿」の文字や、漆塗りの美しい大名駕籠に乗る美しい髪飾りをつけた女性の姿から、姫様の婚礼行列と目される。行列の背景には雪を冠した霊峰富士。「頭を雲の上に出し」と唱歌に歌われる富士山頂は画面の上部を突き抜けて描かれるが、これは後の広重作品などでもお約束の表現。しかし姫様の婚礼の旅は本来、川留めなどで旅程が組みにくい東海道よりも、山沿いを行く中山道での旅が多かったという。今も中山道を「姫街道」と呼ぶことがあるのは、それが由来であるとされる。

1番

葛飾北斎 品川 1801 - 04年

江戸湾が目の前に大きく開けている。様々な人が行き交うが、道中合羽を身につけ振り分け荷物を担いだ画面左側の旅人は江戸市中へ入っていくところか。休み処で座る女性は、埃除け用の揚帽子をかぶりアンニュイな様子。寝そべる牛は牛車をひいてきたところかと思われる。江戸時代、高輪の大木戸から品川宿までの間にある芝車町（牛町）には、牛車による重量荷物の運搬を一手に担った牛屋たちが定住しており、町名はこれに由来する。江戸湾に面したこの地は眺望に優れ、月見の名所としても知られた。朱色の楕円枠に朱で場所を示した横画面による本図は、「上埜（上野）」や「今戸川」、「亀井戸開帳」など同形式の作例が見られ、シリーズとは言えないが一群の作品として見ることができる。無款だが画中の柳腰でたおやかな女性像は宗理型の様式を示しており、寛政末から文化年間初頭にかけての制作であると考えられる。

2番

葛飾北斎
富嶽三十六景 尾州不二見原
1831年頃

北斎錦絵の代表作と称されるシリーズ「富嶽三十六景」の中の一図。36図では収まらず全46図を以って完結したことはよく知られた事実だ。優れて機知的、かつダイナミックな構図の作品が多く見られる本シリーズだが、本図は中でも大胆な作品。「不二見原」は、現在の愛知県名古屋市中区富士見町とされる。画面中央には大樽の形成に一心不乱な桶職人が描かれる。彼は背にしているので見えないうが、観者は、彼が作る桶の大きな丸い輪の中に、遙か遠方に位置している小さな富士を発見する。長方形の画面に巨大な円形（桶の枠）を配置し、さらにその中から小さな三角形（富士）を覗かせるという、計算され尽くした構図。じっと目を凝らさないと主題である富士が発見できない本図からは、北斎の遊び心が見えてくるようだ。

3番

初代歌川広重
道中膝栗毛 瀬戸川
1830年代後半

日本中誰しもが知る、ご存じ弥次郎兵衛、喜多八（北八とも）の道中記『道中膝栗毛』（十返舎一九作、1802-1809（享和2-文化6）年、後に「発端」一冊が文化11年刊）。幕末の文久2（1862）年の改版が知られるなど、江戸後期の滑稽本における大ヒット作だった。そしてこの書物の流行が、広重らの風景版画、特に街道絵制作を後押ししたことも知られている。実際、広重の「東海道五十三次之内 鞠子」（118番）でとろろ汁を食べる二人連れを弥次喜多と目する説もあり、遙か後年の「五十三次名所図会 廿八 赤坂」では彼らが画中に登場する。また加えて「膝栗毛道中雀」のシリーズや双六「浮世道中膝栗毛滑稽双六」などもある。さて「瀬戸川」は藤枝宿（現静岡県藤枝市）近くの川。水位が低い時には歩いて川を渡る様子が、たとえば「東海道五十三次」などには描かれる。出典である原著（三編上）にはエピソードがないが、画面から判断すると、喜多八が按摩を騙して背に乗ったはよいが振り落とされた、といったところだろうか。

6番

初代歌川広重

東海道五拾三次之内 袋井 出茶屋ノ図

1833年頃

現在の静岡県袋井市。東海道27番目の宿場で、副題は「出茶屋ノ図」。出茶屋とは簡易な茶屋のことを指す。葦簀がけで囲い、固めた盛り土の上に筵敷きの縁台、藁葺きの屋根といった体裁。現代で言うならば、オープンカフェと言ったところか。石で固めた台座に設置した簡易な竈には薬缶がかかり、かたわらにある木の枝から自在鉤の替わりであろう縄で吊るしている。茶屋の女性が火を起している。茶屋では駕籠かきの二人と飛脚が休息中。駕籠かきの一人は今、竈から煙管に火を借りているところ。もう一人は座ったまま眠ってしまっているようだ。場所は特定できないが、榜示杭があるところから、宿場の入り口近くだろう。右手に見えるのが袋井宿か。薄墨から白へと変わる煙の表現が印象的な一図。

10番

初代歌川広重

東海道五拾三次之内 吉田 豊川橋

1833年頃

現在の愛知県豊橋市で、東海道34番目の宿場町。副題は「豊川橋」とあるが、吉田大橋のことだろう。本図は『東海道名所図会』巻之三「吉田 豊川」の図を参照したとされており、「吉田」を流れている「豊川」の橋、すなわち吉田大橋を描いたものだという。吉田は松平伊豆守七万石の城下町。近景に描かれたのが居城である吉田城で、豊川の東岸に臨んで建つ。今は櫓の改修工事中でかなり高いところまで足場が設けられているようだ。どうしても目が留まってしまうのが、その足場の天辺辺りで右手をかざしている職人の姿。全般的に人物が小さく描かれた本図の中で、彼の存在が動きをもたらず。左が吉田大橋。長さ120間（約218メートル）で、矢作橋、瀬田唐橋と共に、東海道三大橋の一つに数えられていた。よくよく見ると橋上には槍持や大名駕籠と思しき乗り物が描かれ、大名行列が描かれていることがわかる。

11番

初代歌川広重
東海道川尽 大井川の図
1851年頃

大井川の川渡しの様子が描かれる。平輦台に乗る二人の女性が、左右対称にあたかも向き合うかのように配置され、しかし道中笠をかぶった姿と手に持つ姿とに描き分けている。女性二人が着物の上に羽織っているのは浴衣。単衣物で手軽に洗うことができた浴衣は、女性の旅にはつきもののダスターコートだった。一方、中央やや奥描かれるのは、手すりが四方に付けられた中高欄輦台に乗る女性二人。武家の女性かと思われる。平輦台を担ぐ人足が4人であるのに対し、中高欄輦台の担ぎ手は10人と定められており、料金も平輦台の4倍。富士を背景にした画面奥には大名輿が大高欄輦台に乗せられて運ばれて行く様子も見えるが、この担ぎ手は16から24人程度。先箱や毛槍を運んでいるようなので、大名行列の川渡しの様子も描かれていることが分かる。

16番

初代歌川広重
東海道川尽 はこね谷川之図
1851年頃

「大井川の図」と同様「東海道川尽」連作の一つと目される。左端に記された副題は「温泉湯亭の図」。三枚続きの画面に一人ずつ女性をバランスよく配置する構図は、いわばこの画面の定型である。温泉宿の様子を描いたものと思われ、画面左には手ぬぐいを左肩にかけ、浴衣を左腕に抱えてこれから湯に入ろうとする女性が、中央にはそれを見送る女性、さらに画面右には湯上りの洗い髪の女性が描かれている。右の女性は、襟をくつろげ胸元まで露わ。櫛をさした洗い髪をこれからまとめようとしているのであろうか。東海道の整備と共に湯治場としての姿を整えていった箱根七湯。江戸後期には療養よりも遊楽目的の箱根での湯治が一般化した。広重が遺した『武相名所旅絵日記』（1852（嘉永5）年頃）には、自身が実際に箱根での湯治を楽しんだ旅の記録が収められており、これによれば湯本、塔ノ沢、芦ノ湯などを巡る、いわゆる「七湯めぐり」をしたことがわかる。

17番

美容

初代喜多川歌麿 名所風景美人十二相 結髪 1801-03年頃

初代喜多川歌麿名所風景美人十二相結髪画面上部に描かれた巻物には、「名所風景美人十二相」とある。「名所風景美人十二相」は名所12景を選んで、各名所絵に象徴される美人を描きわけたシリーズといわれているが、描かれた女性に、どの名所が象徴されているのかは判然としない。大きな丸鬘を結った女性が、少女の髪を整えている。丸鬘は、既婚女性の髪型であるので、女性は母親だろう。若い時の鬘は大きく、年配になるにつれて小さくなった。江戸中期以降になると、結婚するとお歯黒を染め、妊娠すると眉を剃るのが一般的であったが、この母親には眉があり、お歯黒もしていない。『守貞漫稿』に「浮世画師と云もの美人を画く、30歳以下20歳以上の婦、今世風必眉を剃と雖も、図画には意匠を以て眉を描く」とある。歌麿は若い母親を美しく見せるために、眉を描き、お歯黒を描かなかったのだろう。母親に見向きもせず、一心に鏡をみつめている娘の姿が愛らしい。

20番

鳥居清峰 風流五葉松 端午 1804-18年

女性は眉を剃り、お歯黒をつけているので母親である。おんぶをせがみ、化粧のじゃまをする男の子をやさしくあやす母親の姿。当時、白粉は、顔だけでなく、首や背中、胸まで幅広く塗っていた。『都風俗化粧伝』には、「殊に小児のある人は乳を呑まさんが為め胸を押開くるものなれば心を付けて肌白粉をなすべし」とある。白粉は薄くつけるのが良いとされていたので、母親は胸元についた余分な白粉を布で拭っていたのである。しのじ鬘に結った髪には、華やかな櫛や簪を挿している。寛保（1741-44）頃に、水牛の角を加工した偽鬘甲が作られ、鬘甲に似た髪飾りが普及していた。

清峰は鳥居清長に学んだが、本作は歌麿が得意としていた女性の半身像を描く大首絵であり、画風も歌麿に近い。歌麿の「風流五葉の松」と題した揃物には、娘の襟足を剃刀でそる若衆の図がある。本作は、歌麿の「風流五葉の松」を意識して作られたのではないだろうか。

22番

歌川国直 夏 1810年頃

国直は初代歌川豊国の門人。画面上部の年玉の中に「夏」と書かれている。他に「冬」と書かれた作品もあり、揃物であったと考えられる。年玉とは、年という字の草書体を枠の形に意匠化したもので、同門の歌川国貞の作品にも多く見られる。

縁側で、洗髪している母親にかまってほしそうにまとわりつく子供。母と子のなにげない日常を描いているようだが、絵師の主眼はそこにはないようで、鏡の中には襟足が描かれており、若い母親の艶めかしさが強調されている。当時、今の銭湯にあたる湯屋はあったが、鬢付け油のついた長い髪を洗うのは、時間がかかり大変だったので、縁側や庭で洗っていた。洗髪の頻度は、江戸初期は年に数回、江戸中期でも月に1、2回程度だったと言われている。

24番

歌川国貞（三代豊国） 今風化粧鏡 口紅 1820年代初期

「今風化粧鏡」は鏡の中に映った様々な身分や環境の女性を描いた揃物で十図からなる。鏡に映った姿という趣向であるが、左右は反対になっていない。国貞の画業を代表する美人大首絵のシリーズである。描かれているのは、遊女だろう。髪はつぶし島田に結っており、華やかな鼈甲の櫛や簪、笄で飾られている。当時は、小さい口が好まれていたが、小さすぎる口は格好が悪いとされた。『都風俗化粧伝』には、「口の狭きを広く見する伝」があり、「口を広う見せんと思わゞ、紅を一ぱいにつくれば大きく見ゆるなり。紅も濃くつくるがよし」とある。遊女は、内側に紅を塗った紅猪口を持ち、紅の濃さを整えているのだろう。

今風化粧鏡 おはぐる 1820年代初期

天神髻を結った女性が、筆でお歯黒をつけている。眉をまだ剃っていないので、若い妻だろう。当時流行りの弁慶縞の着物を着ている。弁慶縞は、歌舞伎十八番「勧進帳」の弁慶の衣裳に由来する。若妻は初めてお歯黒をつけたのか、鏡に映る自分の顔をまじまじと見つめている。唇には、お歯黒がついたままなので、この後、口を漱いで手拭で唇を拭き取るのだろう。お歯黒をつけるとき、唇にしみて痛む場合には、鬢付け油を唇にぬっていたようである。

今風化粧鏡 毛ぬき

1820年代初期

描かれているのは遊女。髪型は、島田髷の髪の毛の余りを笄に巻きつけた島田くずしである。高価な鬘甲の簪や笄を沢山挿しているので、高位の遊女だろう。鏡に身を乗り出して、一心に毛抜きで眉を整えている。着物に白粉がつかないように、左手で襟を押さえている。『都風俗化粧伝』には「眉を作る伝」があり、「丸き顔には眉を短く作りてよろし。これ面を長く見せんがためなり。頬にて少し張りたるか又下ぶくらなる顔形は眉を太く作るべし。是上の方を強く見せんがためなり」と、目の錯覚を利用した眉化粧が紹介されている。

28番, 29番, 30番

溪斎英泉

鏡台前 髪結い

1820年頃

櫛をくわえながら、髪を整える女性。鏡台の引き出しは、鏡に顔が近づきやすいように、横についている。鏡台には大きな2本の簪、引き出しの中には櫛が見える。部屋持ちの遊女だろう。鏡の前で身支度をする遊女を後ろから男が誘う様子。男は前髪があるので、元服前の若衆である。遊女は手で元結を握りしめたまま、右手は若衆に取られているようである。胸元を露わにして、片膝を立てた姿が艶めかしい、あぶな絵である。

33番

歌川国貞 (三代豊国)

当世三極志 三代目市川市蔵、四代目中村芝翫、初代河原崎権十郎

1860年

中国の『三国志』の豪傑に見立てた、初代河原崎権十郎、四代目中村芝翫、三代目市川市蔵。青い着物の片袖を脱ぎ、手拭いを肩掛けにして、三者三様に腕や肩、胸の入れ墨を見せつけている。初代河原崎権十郎の入れ墨は獅子牡丹。三日月夜に飛ぶ蝙蝠が描かれた団扇を持っている。四代目中村芝翫の入れ墨は桃の花。髷の先が海老の尻尾のようになった海老茶筌を結び、ビードロのグラスを持つ。肩には懸守をかけている。銀の鎖の紐がついた懸守は、伊達男に好まれていた。三代目市川市蔵の入れ墨は、宝珠を持つ龍。歌舞伎役者は、舞台上の華のある凛々しい姿だけでなく、身にまとう粋で最先端のファッションも、当時の江戸の女性たちの心を魅了していたのである。

36番

猫

鈴木春信

見立塗桶の暮雪

1767 - 68年頃

中国の「瀟湘八景」になぞらえて選定された日本の「近江八景」を、当世風俗に見立てて描いた。図は、その一つ「比良暮雪」が題材になっており、座敷では女性が綿摘みをしている。綿摘みは、塗桶をという道具を使って綿を伸ばし、小袖の中入れ綿や綿帽子を作る内職で、主に女性の仕事であった。しかしながら、江戸時代、綿摘み屋といえば、それを表向きの仕事として密かに春を売る私娼のことであった。比良の山は近江国（現在の滋賀県）琵琶湖西岸にあり、比叡山の北に連なる天台修験の霊場であった。この比良の雪景を塗桶にかぶせた綿で表現しているのである。傍らには、トラ柄の猫が一匹、心地よさげに丸まっている。首玉（首輪のこと）をしているので、女性の飼い猫であることが分かる。上り口に腰かけているのは、真綿を持ってきた下働きの若衆。ついでに世間話、といったところであろう。

38番

初代歌川広重

名所江戸百景 浅草田圃西の町詣

1857年

格子窓の外を一匹の猫がじっと見つめる。視線の先には、夕暮れの田圃の中を往く群衆。人々の手には、大きな熊手が見える。ここ浅草田圃は、江戸吉原の後方にあった水田地帯である。廓の一角は高樓が軒を連ねたが、一歩外へ出ると田圃しかない寂しい場所であった。しかしながら、酉の市で有名な鳳大明神があり、11月の酉の日には大勢の人々が、幸運や富を搔きよせるといわれる縁起物の熊手を買って求めにやってきた。猫がいるのは妓楼の一部屋で、飼い主は遊女であろう。広重は、猫に遊女の心を投影させたのであろうか。あきらめとも、達観ともとれる、何とも言えない面持ちである。人物は描かれませんが、畳に置かれた枕紙や、窓辺の口を漱ぐための茶碗と手拭いから、客の相手をしている最中と推測される。縁起物をつけた熊手の形をした簪は、客が酉の市で買って来た贈り物であろう。

40番

初代歌川豊国

おそめお六・鬼門の喜兵衛

1813年

1813（文化10）年初演の歌舞伎狂言「お染久松色読販」の「小梅菘屋の場」を描いた団扇絵で、輪郭を切り取って団扇の骨に貼ることができる。物語は大坂の油屋の娘お染と丁稚久松の心中事件が脚色され、お染の七役で有名。五代目岩井半四郎が、お染、久松、その姉の竹川、お染の義母貞昌尼、土手のお六、久松の許嫁お光、賊の女お作の七役を早変わりで見せた。コマ絵には、おきゃんな面立ちのお染が、ぶち猫を抱いている姿が描かれる。きらびやかな着物と髪飾りが、いかにも商家のお嬢様風である。本絵は七役のうち土手のお六と、五代目松本幸四郎演じる夫のたばこ切鬼門の喜兵衛。画中に書かれた台詞にあるように、お六はかつて吉原の土手で引手茶屋を営んでいたが、今は賃粉切り（煙草の葉を刻む職人）の喜兵衛と夫婦になり、洗濯屋をしながら小梅代地に住んでいる。男言葉で啖呵をきってゆすりを働く毒婦であるが、半四郎は対照的な別人を見事に演じ分けた。

41番

溪斎英泉

猫を抱く娘

1843 - 46年頃

本図は、大判を縦に二枚つないで鑑賞するタイプの錦絵で、表装して掛幅として鑑賞されることを意図しているため「掛物絵」と呼ばれる。図は、あどけなさの残る若い娘の全身像が、画面いっぱいに描かれる。腕に赤ぶちの猫を抱き、髪にはきらびやかな飾りをぜいたくにつけている。裕福な商家の娘であろうか。娘が前髪に結んだ手絡と猫の首玉は、お揃いの鹿の子絞りの布で作られており、相当お気に入りのペットであったことがうかがえる。

よく見ると、襦袢の半襟には蝶の柄。猫はこれを見つめているのであろうか。古くから、猫と蝶の組み合わせは画題とされてきた。これは年寄を意味する耄耋（ぼうてつ、どちらも70歳あるいは80歳の意味）という漢字が、それぞれ中国語で「猫」と「蝶」と同音であるため、長寿の吉祥とされてきたからである。

42番

溪齋英泉
扇屋内花扇
1830 - 44年

本図に登場するのは、生きた猫ではなく、帯の柄の猫。後ろ向きのぶち猫が見つめるのは、牡丹と蝶。猫と蝶の組み合わせは、中国語の音が「耄耋（ぼうてつ）」と通じるため、長寿の象徴である。牡丹は花びらが幾重にも重なり咲き誇る姿から富貴の象徴とされ、「百花の王」とも呼ばれる。古くから、猫・牡丹・蝶の三つの組み合わせは、吉祥画として好まれてきた。これを大胆に帯の柄としているのは、吉原の妓楼扇屋で最高位の遊女花扇である。

さらにいえば、打掛の柄は「竹に鷺」。竹は寒さに耐え、たわんでも折れない強さがあることから「平安」を意味し、「鷺」は「路」と同音であることから、合わせて「一路平安」を示す。これは旅立つ人を見送る際に無事を祈る言葉である。画中の短冊形に記された「君は今駒かたあたりほとゝぎす」は、有名な高尾太夫が愛しい人の帰路を想って詠んだとされる句である。したがって図は、後朝の別れの情景ということになる。

43番

歌川国丸
夏の風情
1811 - 14年頃

初夏の朝の女たちを三者三様で描く。庭には大輪の白い紫陽花が咲いている。ここは芸者の住まいであろうか。蚊帳の中の女は寝起きで、髪の毛がほつれて胸元ははだけ、外れかかった簪を挿し直している。蚊帳の裾には、一匹のぶち柄の猫。鈴がぶら下がった首玉をつけているので、この家の飼い猫であろう。蚊帳から出ようとして、引っかかってしまったのだろうか。飼い主らしき蚊帳の女が、その様子を見て微笑んでいる。

縁側の女もまた、寝起きの様子である。房楊枝という、先端を房状にした道具で、歯を磨いているところ。足元には、口すすぎ用の茶碗が置かれている。手絡と呼ばれる縮緬布を鬘に掛けているところをみると、半玉と呼ばれる見習いの若い芸者のようである。蚊帳を片付けようとしている女は、芸者たちの世話をする女中である。箱持ち、あるいは箱廻しとって、客席に出る芸者の供をして三味線箱を持ったりもする。他二人に負けず劣らず美人である。

44番

歌川国貞（三代豊国）

縁むすび 女夫評判 盥の金性 こたつの火性

1820年代初期

木・火・土・金・水の5つの元素が万物を構成するという中国の古代思想の五行と、これに関連付けた美人画のシリーズからの一枚。本図は、盥の「金性」と炬燵に使う炭の「火性」を描く。

もろ肌を脱ぎ、胸元があらわになった女が、盥の水につけた手拭いで体を拭いている。あぶな絵と呼ばれるエロティックなきわどい図様であるが、五行にかこつけることで、いかにも哲学的な体裁をつくらしている。耳の後ろまで念入りに磨いている姿が色っぽい。引眉（眉毛を抜いたり剃ったりする）にお歯黒をつけており、既婚者、あるいは妾であることが推測されよう。手前の黒い帯はこの女のものと思われるが、背後の幅の狭い帯は男物のようにもみえる。これは旦那用であろうか。

後にあるのは置炬燵で、炉を入れた櫓に布団をかけている。暖をとろうと三毛猫が潜り込もうとしている。コマ絵には、料理屋の娘が台十能と呼ばれる道具で火の付いた炭火を持って運ぶ姿が描かれる。

45番

歌川国貞（三代豊国）

縁むすび 女夫評判 おはぐろのかね性 うがひの水性

1820年代初期

前図と同シリーズからの一枚。本図は、お歯黒の「金性」とうがいに使う水の「水性」を描く。図には、幼子を背負った母親が描かれる。飼い猫であろう三毛猫が着物の裾にじゃれついたので、ふくらはぎがあらわになってしまった。こちらも一種のあぶな絵である。幼子は竹竿に布きれをつけた手製のねこじゃらしで、猫と戯れる。

コマ絵では、引眉をした既婚女性がお歯黒の道具を用意しているところ。お歯黒は、鉄くずを焼いて茶の汁や酢に浸して酸化させた褐色の液体を歯に塗ることで、主に既婚女性の間で行われた。五倍子の粉（白膠木の葉にできる虫こぶで作った染料）を混ぜることもある。手にはうがいの用の茶碗と、お歯黒沸かしと呼ばれるお歯黒を沸かす器を持っている。床には耳状の取手が付いた耳盥（みみだらい）が置かれる。その上には渡し金が架け渡され、五倍子箱と呼ばれる五倍子の粉を入れる容器が載っている。

46番

歌川国貞（三代豊国）
戯絵兄弟 堀川の段
1820年代後半

絵兄弟とは、一見無関係な二つの絵（コマ絵と本絵）を結び付けてその趣向の面白さを楽しむもの。タイトルの「堀川の段」は、「お俊伝兵衛」ものとして知られる歌舞伎狂言「近頃河原達引」的一幕である。

コマ絵に描かれるのは、遊女お俊の兄の猿廻し与次郎。心中を決意して聖護院に旅立つお俊と伝兵衛に、祝言の盃代わりに「お初徳兵衛の祝言の寿」を猿に演じさせるという場面。訳あって人を殺して身を隠している伝兵衛に、姿を変えるようにと猿廻しの衣装を渡す。

本絵の方は、美人が搔卷の傍らに座り、箱枕に枕紙を覆っているところ。絵兄弟だけに、与次郎の妹お俊であろう。箱枕は、猿廻しで猿が乗ったり跳んだりする台に見立てられている。傍らには猿ではなく、ぶち猫。「シャー」と鳴いて威嚇するときのポーズをしている。この美人がお俊であれば、そのお相手は伝兵衛ということになるだろうが、猫は二人の不吉な未来を察してこのような仕草を見せているのかもしれない。

47番

歌川国貞（三代豊国）
風流十二月ノ内 小春
1820年代後半

幼子の髪を母親が結っているところを描く。じっとしていられず、通りかかった猫にちょっかいを出すのが、猫は迷惑そうな顔で逃げようとしている。このように頭頂のところだけ髪を残しまわりを剃った髪型を、芥子の実に似ていることから芥子坊主という。江戸時代において男女ともに一般的な髪型であった。

タイトルの小春とは10月のこと。恵比須講といって、陰暦10月20日に商家では商売繁盛を祈って親類や知人を招いて祝宴を行った。画面右上には、恵比須像とお供えの神酒と鯛が描かれている。

幼子の着物は、鎌の絵に丸い輪と「ぬ」の文字を配して「かまわぬ」と読ませる模様になっている。江戸時代初期に町奴の間で流行した模様であるが、のちの江戸時代後期に歌舞伎役者の七代目市川団十郎が舞台上で好んで着たことによって再ブームとなった。母親の着物の柄は蝙蝠柄（こうもりがら）で、蝙蝠の「蝠」の字が中国語で「福」と同音であるため、吉祥を意味する。

48番

歌川国貞（三代豊国）

誂織時世好

1844年頃

町屋のおかみさん風の美人が、子どもに「高い高い」するように、両手で猫を持ち上げている。飼い猫であることを示す首玉には、大きな鈴がぶら下がっている。口には飴のようなものを含み、舌の上に出して猫に見せている。足元には菓子袋が置かれている。

本図は、大判を縦に二枚つないで鑑賞するタイプの錦絵で、表装して掛幅として鑑賞されることを意図しているため「掛物絵」と呼ばれる。題名の「誂織」とは特別に注文した織物のこと。模様の牡丹唐草は富貴の象徴であり、瑞雲はめでたいことが起こる前兆を意味する。反物からは「アタリ」と記された札がついており、この美人が置かれている状況を示していると思われる。誂織の模様や、美人の比較的質素な装いから考察すると、富くじか何かに当たり、ひとまず菓子を購入、その喜びを飼い猫に報告しているのではないだろうか。

49番

歌川国芳

子宝遊 見立七福神寿老ゑびす

1842年頃

二人の子どもが、七福神の寿老人と恵比須の真似をして遊んでいる。子どもは奴という髪型で、武家の奉公人である奴のように、耳の上と頭の後部にだけ毛髪を残して、他を剃ったものである。江戸時代において、子どもの一般的な髪型であった。

右の子どもは菓子袋を頭に被り、寿老人の長い頭を表している。肩に担いだ竹馬は、寿老人のアイテムの巻物を先端につけた杖である。猫を小脇に抱えているが、これまた寿老人がいつも連れている玄鹿に模したのであろう。玄鹿は千五百歳を経た鹿で、その肉を食すと二千年の長寿を得るといふ。

左の子どもは、恵比須のトレードマークである鯛の引き車のおもちゃを携え、小さな魚の付いたおもちゃの釣竿を持つ。後前に着た緋縹の半纏と頭に被った籠は、恵比須が着る狩衣に見立てているのであろう。

60番

二代歌川国貞
当盛美人揃之内 まついちょう ろうか
1855年

ここは本所松井町（現在の東京都墨田区）。豎川を渡るとすぐの回向院は、勧進相撲や出開帳など娯楽の地として知られ、その近隣の松井町も料理屋や妓楼が軒を並べる繁華街であった。

図は引手茶屋の廊下であろうか。下げられた食べ残しの料理を猫があさっている。どことなく痩せて貧相な猫である。首玉をつけていないところを見ると、野良猫が上がり込んだのかもしれない。お目当ての魚を見つけるが、身の部分はあまり残っておらず、骨だらけである。それでも、野良猫にとってはごちそうであろう。

障子戸に手をかけ、魚をくわえた猫を見つめる遊女は懐紙を持っており、廁から帰ってきたところのようである。室内の屏風には客のものと思われる男物の着物と帯が掛けられている。

64番

歌川国芳
初雪の戯遊
1847 - 50年頃

積もった雪で作ったのは、雪だるまではなく大きな猫。作っているのは、片外しという筭一本で結いまとめた髪型であることから、御殿女中たちであろう。首玉まで精巧に作っている。雪の中に裸足でいるが、冷たくないのだろうか。右の女中はかじかんだ手を口にあてて温めている。若君がこれを見にやってきた。傍らのお供は手あぶり火箸を差し出している。もう一人は太刀を持っている。こちらの三人は、はさすがに裸足ではなく足袋と高下駄を履いている。

若君の着物には笹竜胆を変形したような紋が見えるが、江戸時代において、浮世絵や歌舞伎の衣装に用いられる笹竜胆紋は、源氏、あるいは將軍家を示唆する。したがって、この図は源氏絵の一種といえようか。源氏絵といえば、『偽紫田舎源氏』の挿絵を手掛けた国貞（三代豊国）が有名である。しかしながら、多くはないが国芳もまた源氏絵を手掛けている。

51番

歌川国芳・歌川鳥女
山海愛度図会 えりをぬきたい
1852年

諸国の名産物の図をコマ絵に描き、これと関連させた美人画を本絵に描いたシリーズ。本図のコマ絵は、遠江（現在の静岡県西部）を描く。署名の「とり画」は、国芳の娘で女絵師の鳥女作であることを示す。短冊形に記された「須之股川」がどの河川なのかは判然とはしないが、広々とした水辺の景観から、遠江の名所である浜名湖を描いた図と思われる。漁師が蛤のような大きな貝を採っている様子が描かれる。また魚偏の漢字は鰻のこと。

本絵の美人は鏡を見ながらうなじをさすっている。コマ絵タイトルにある「鰻」との語呂合わせであろう。床では二匹の猫が戯れる。「えりをぬきたい」とあるが、これは着物を着る時、後ろ襟を少し引き下げて隙間をあげ、うなじをきれいに見せること。抜きすぎると下品に見えるし、ぴっちりと密着させては粋でない。茶碗には白粉が入っているが、顔だけでなくうなじにも塗るのである。当時の女性がいかとうなじをきれいに見せるかということ、重要視していたことがうかがえる。

54番

二代歌川広重
ふらんす
1860年

1858（安政5）年に安政五か国条約が締結された翌年、横浜港は開港した。横浜の外国人居留地には、アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランス・中国などから来た関係外国人が住むようになると、日本人は彼らがもたらす異国文化に強い関心を抱くようになった。浮世絵界においても、多くの絵師たちが横浜に出向いて観察し、外国人たちやその風俗を描いた錦絵を制作した。このような絵を横浜絵といい、特に1860（万延元）年から翌年にかけて集中的に刊行された。

図は、フランス人の母子が遊歩している姿を描く。婦人のスカートは、当時のフランスで主流であったクリノリンというスタイルで、堅い布地に鯨のひげなどをつけて張りを出して広げている。上半身は、前にボタンと裾にフリルをつけたジャケットを着ている。男の子は、大きな黒の洋犬にまたがっている。画中の和歌は、「風のねを訊てひらきしさし傘にもやとみまかふ花のふらんす」。

76番

初代歌川広重
戯画女湯のぞき、子供のケンカ
1840年代初期

初代広重による戯画で、「二丁掛」といって画面を上下に区切ってそれぞれ一図とした形式で描かれる。上図は、男二人が湯屋を覗いているところ。夢中になりすぎて、徳利の酒がこぼれている。もう一人も着に買った蛸の足が包みからこぼれ落ちてしまい、これを通りすがりの犬がくわえていってしまった。しかしながら、どちらも気づく様子はない。

下図は、丁稚の子どもが道端で大ゲンカを始めてしまった。一人はお使いに持っていく途中の鯉が入った籠を落としてしまい、これまた犬がくわえていってしまった。もう一人は、油揚げを買ってくるように頼まれていたのだろう。こちらも落としてしまい、ことわざ「鳶に油揚げをさらわれる」のように持っていかれてしまった。どちらも帰ったら大目玉をくらうであろう。

75番

歌川国貞（三代豊国）
小倉擬百人一首 周防内侍 白井権八
1846年頃

国貞・国芳・広重の合作によるシリーズで、小倉百人一首の和歌を画面上部に配し、関連する図様を本絵として下部に描いた。本図は国貞描く周防内侍と白井権八。和歌は、「春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ」。春の夜のはかない夢のような戯れで、あなたの腕を枕としてお借りしたら、くだらない恋の浮名が立つことが残念に思われますよ、という歌意である。

本絵は、1823（文政6）年初演の歌舞伎狂言「浮世柄比翼稲妻」より「鈴ヶ森の場」の白井権八を描く。人を切り殺して国許を出奔した権八は、江戸近郊の鈴ヶ森で、権八を捕えよという手配書を見た大勢の雲助相手に立回りになる。権八が手にしているのは、その手配書。切れ端を白黒ぶちの狛がくわえてきた。人相書きであろうか。偶然居合わせた幡随院長兵衛との出会いを果たす。詞書は合巻作者柳下亭種員によるもので、「彼村正の切味は 色にも手練の若衆より 八重梅うたふ土手節八 其通ひ路の業呉事（わざくれごと）一節切（ひとよぎり）と八名を聞くもいと憂し」。

72番

犬

歌川国丸

狎を抱く女

1818 - 30年

次の図（67番）とそっくりな犬が、同じく美人の腕に抱かれている。鼻の上の毛が黒っぽく、より写実的といえよう。愛らしく目をくりくりさせ、主人であろうこの美人によく懐いている様子である。日本における狎の歴史は、奈良時代にさかのぼり、中国から輸入された。小型犬で、目は丸く大きく、顔は平たくしゃくれ、目と鼻の距離が近いのが特徴である。体毛は長く、図のように茶と白のぶちのほか、黒と白のぶちも多い。狎ころと呼ばれることもある。

この美人は遊女であろうか。髪にはべっ甲の髪飾りをふんだんに使い、下唇には笹紅と呼ばれる青く光る笹紅をさしている。重ね着した紋付の着物の上には、鮮やかな配色のよろけ縞のちゃんちゃんこをさらに重ね、冬の装いといったところである。

68番

初代歌川豊国

いまやう六花せん 紫陽花

1810年頃

平安時代の『古今和歌集』に記された六人の優れた歌人を示す「六歌仙」になぞらえて、「いまやう（今様）」、すなわち当世風の美人を六種の花と組み合わせたシリーズの一枚。

本図は、地面から力強く生える紫陽花の大輪を背景に、犬を腕に抱いた美人を描く。くりっとした愛らしい目、垂れた耳、長めの体毛から、狎ではないかと思われる。

美人は洗い髪を垂らして横櫛を挿す。引眉にお齒黒という既婚者らしい風貌で、ふっくらとした柔らかな色気がある。緋模様の薄物に白い襦袢を重ねた清涼感のある着こなしであるが、透けて見える二の腕がなまめかしい。肩に掛けているのは前垂れで、本来は腰に巻き下げるものであるが、洗い髪の際は着物を防護するために、肩に掛けることもあった。

67番

セクション2

金魚

磯田湖龍齋

雛形若菜の初模様 大かなや内白たえ

1770年代中期

1748（寛延元）年刊行の『金魚養玩草（きんぎょそだてぐさ）』は、日本で初めて本格的な金魚の飼育と繁殖について書かれたハウツー本である。著者の安達喜之は泉州堺の住人で、序文で金魚が日本に伝来した時期を1502（元亀2）年と紹介している。金魚は最初に堺の港に伝来し、その後も度々原産地の中国から輸入され次第に日本に広がったとされる。江戸前期には高値で取引され大名や富裕層の間で珍重された金魚だが、こうした飼育法が普及し庶民にも金魚を愛玩する文化が浸透していった。本作品は『金魚養玩草』から約30年を経た頃に制作され、遊里の屋内で飼育される金魚とそれを鑑賞する遊女たちが描かれている。石の鉢には沢瀉（おもだか）と水草を栽培し、現代で言う「ビオトープ」を楽しんでいる。鉢に飼われた色鮮やかな金魚は、華やかな衣裳をまといながら自由な外出がままならない吉原の女たちにも喩えられた。

77番

喜多川秀麿

金魚玉を持つ若衆と娘

1804 - 18年

歌川国安

風流娘手遊 金魚

1811 - 44年頃

溪齋英泉

金魚玉を持つ娘

1830 - 44年頃

若衆や娘が手にしているものは「金魚玉」と呼ばれ、主に金魚を観賞するために用いられた小さなガラス（びいどろ）製の容器である。町中で商いをする金魚の行商人は、客が持参した器に金魚を入れるか、金魚玉に金魚を入れてセットで販売していた。びいどろの国内生産は、『和漢三才図絵』によると1713（正徳3）年の時点では長崎、大坂で製造が行われており、1750年頃には江戸でも開始されていたようである（『嬉遊笑覧』）。1768（明和5）年頃になると、温度計や金魚玉が江戸で製造されていたという記述があり、金魚玉を題材にした川柳も登

場するようになる。びいどろの金魚玉は、それまで水盤の上から眺めるだけであった鑑賞者の視界を拡大し、広く庶民の間でも金魚への関心が高まる一因となった。当初、金魚玉は握りこぶし大の小振りなものであったのが、製造技術の発達にともない大きな容器も作られるようになった。金魚玉を手に取り、飽くことなく眺める娘たちの姿は、浮世絵師にとって格好の画題であった。

79番, 81番,82番

歌川国芳 今様伊勢物がたり 1849年

平安初期の歌物語『伊勢物語』を当世風に見立てた作品。高貴な身分を示す紫の紐で大髷の髻（もとどり）を巻いた棒茶筌の人物が在原業平である。優れた歌人でモテ男の代名詞でもある業平は、同じく平安期に成立した『源氏物語』に多大な影響を与えた。業平は色好みの雅人として描かれることが多く、本作でも二人の美女と贅を凝らした調度に囲まれている。業平の後ろにいる色鮮やかな鳥は南蛮渡りの鸚鵡であろうか、「東下り」に登場する都鳥の見立てになっている。右に描かれた大きな水槽では、高値そうな金魚が複数匹水中を乱舞している。日本国内での板ガラス製造は、明治に入った1909年に初めて成功しており、江戸時代にこのような大きさでかつ水圧に耐えられる板状ガラスを国内で製造することは技術的に困難であったと考える。これと同型の水槽が『修紫田舎源氏』（三代歌川豊国画）16下巻の中でも描かれており、当時実在したものか（その場合は輸入された板ガラスを用いたのか）、あるいは絵師による想像の産物であったのかが気になるところである。

84番

歌川国芳 文月 1849年

旧暦の文月は現在でいう7月下旬から9月上旬頃にあたり、秋の訪れが感じられる季節である。微かな光を明滅させる川辺の蛍と、秋の七草である萩と桔梗が薄墨で描かれている。雪洞（ぼんぼり）が灯された室内は、女性達の豪華な衣裳により明るく感じられる。室内の上部に見える巨大な金魚玉と周りを彩る豪華な装飾は、涼しさを演出するための大がかりな仕掛けであり、球状の金魚玉を満月に見立てる趣向であろうか。雪洞二つ分ほどの大きさに描かれている金魚玉は、江戸時代のガラス製法から考えて実在したかは疑問である。一筋立ち上る高炉の煙が、秋の気配を語っている。

85番

二代歌川国貞

あづまげんじ みたて五節句 さつき

1855年

合巻本『倭紫田舎源氏』の主人公・光氏を、本編のあらすじとは関係なく錦絵に登場させた作品。五節供のうちの、端午の節供を見立てて表している。大人の体よりも大きな鉢を覗き込みながら、金魚たちに餌やりする子供。その額には、除魔を祈願する菖蒲が巻かれている。中央の女の背後に吊られた薬玉は、かつて端午の節供の折に宮中で行われていた薬玉を贈り合う習慣に因んでいる。左下に描かれている団扇6枚を使った「扇風機」は、中心近くに付けられた取手を手で回して風を送った。『東都歳時記』によると、1838（天保9）年の時点で金魚の種類はわきん、らんちゅう（蘭虫）、三つ尾、ふな尾、さらさ（まだら）など数種類があると述べている。らんちゅうは江戸では丸子（まるっこ）と呼ぶなど、同一種でも地域によって呼び方が変わることもあった。

92番

歌川貞秀

新吉原京町一丁目 角海老屋内 東路

1840年代初期

江戸最大の歓楽街として名高い吉原は、江戸時代初期には日本橋葺屋町東側あたりに位置していた。1657（明暦3）年正月におきた大火（明暦の大火）の後、吉原は浅草千束村へ移転し、移転前を旧(元)吉原、移転後を新吉原と呼び区別した。吉原の大門口をくぐり、メインストリートにあたる仲の町を奥まで進むと京町である。1800（寛政12）年から京町1丁目右側の角に進出した海老屋は吉原でも名が知られた妓楼で、英泉や国貞といった名だたる美人画の名手が見世の花魁や遊女たちを描いている。金魚鉢を鑑賞する吉原の女たちを題材にしており、金魚鉢は異国渡りを思わせる豪華な陶器へと変化している。中で泳いでいるは金魚と緋鯉、メダカであろうか。一緒に栽培されている縞模様の植物は縞太藺（しまふとい）で、鑑賞用のほかに水質の浄化作用があることから、現代も金魚の飼育の際に用いられている。

90番

その他の動物

歌川芳豊 異国渡り大象の図 1862年

1863（文久3）年、インド象の見世物が、江戸両国橋西詰において興行された際の錦絵である。当年3才、高さ1丈2尺（約3.6メートル）、目方2,800貫目（約10トン）、身ノ丈3間半（約6.3メートル）、鼻の長さ8尺（約2.4メートル）と書かれている。絵師の芳豊は国芳の弟子であるが、この興行に際して20点前後という大量の見世物絵を描いた。別の一図には、「一度此靈獣を見る者は七難を即滅し七福を生ず」という詞書が書かれ、眼福によって除魔招福のご利益があると述べている。これまで、靈獣と位置付けられていたものが実際に見られるのだから、江戸の人々にとっては相当なインパクトがあったようだ。

舶来の象は、1408（応永15）年に若狭國小浜にもたらされたのが最初といわれ、また、「享保の象」と呼ばれる、1728（享保13）年に中国から長崎経由で將軍に献上された雄雌二頭の象が有名である。象に限らず、前図のラクダや豹、虎など舶来の珍獣ものは他の見世物と比べて割高であったが、それだけ人気の高い興業でもあった。

101番

歌川国貞（三代豊国） 五節句ノ内 弥生 1830年代前半

都鳥が波間に漂う隅田川に一艘の渡し舟が浮かぶ。ここは隅田川東岸の寺島の渡し場で、西岸の橋場と結ぶ。隅田川沿いにのびる堤には、三囲稻荷から木母寺の辺りまで桃・桜・柳の木が植えられ、とりわけ春は花見の名所として賑わった。鳥居がある木立は水神の森であろう。河畔の風光明媚な景観を望むため、対岸の橋場には料理茶屋が軒を連ねた。右図と中図の女性たちは、花見の帰りであろう。

一番左の女性は猿回し。往来で猿に芸をさせ、見物客から金銭をもらった。猿引きともいう。猿は古くは馬の病気を防ぐという俗信から、厩の守護神として厩で飼われていた。鎌倉時代には、芸を仕込まれた猿が登場した記録が残る。江戸時代には、大道芸のほか、正月の縁起物の一つとして門付けして回ったり、武家の厩でお祓いをしたりして礼銭に預かった。江戸には多くの猿回しがあり、浅草猿谷町あるいは山谷の新町などに住んでいた。右の女虚無僧も門付け芸人の一種であろう。

93番

歌川国貞（三代豊国）

鷹匠

1830年代前半

鷹匠は、鷹や隼を飼育・訓練し、鷹狩に従事した人々で、古く王朝時代からあった。鷹狩は勇壮な遊戯であるため、武家に好まれ、戦国時代以降大名に愛好者が輩出し、鷹匠は高禄で雇用された。幕府の鷹匠は、将軍徳川綱吉の生類憐みの令により一時廃止されるが、吉宗が再興した。諸藩の鷹匠もこれに準じ、鷹術の諸流派が発展した。

図のように、浮世絵では元服前の若衆の姿で描かれることが多い。右手には策と呼ばれる、羽根を整えたり汚れを落としたりする鞭を持っている。左手には、鷹匠の拳と鷹の爪を保護するための鷹鞆（たかゆかげ）と呼ばれる革手袋をはめ、足に繋ぐ招縄を巻いている。若衆鷹匠のモチーフは、大津で土産物として売られた大津絵においても多く描かれた。鷹が農作物を荒らす鳥を駆除することから五穀豊穰、あるいは、上空から獲物を見つけることから失せ物発見などの護符として用いられた。

94番

歌川国芳

英雄日本水滸伝 近江の阿兼

1844 - 45年頃

勇ましく馬の手綱を掴んでいるのは、近江の阿兼。近江国海津（現在の滋賀県高島市）の遊女で、大力で有名であった。暴れ馬の手綱を下駄で踏んづけて押さえたという伝説が残り、歌舞伎舞踊にも取り入れられた。画中の詞書には、その武勇伝が記されている。

口にくわえているのは風呂で使う糠袋（ぬかぶくろ）。肌をこすって洗うのに使う糠を入れた袋である。肩には手拭いがかかり、右手には脱いだ着物を抱えている。髪の毛も軽くまとめただけであり、どうやら湯屋帰りであるようだ。浴衣は馬の轡（くつわ）と桜の花と蜘蛛の巣の柄になっており、これは「轡・花・巣」で「轡放す」のだじゃれと解されようか。障泥（あおり）という馬の脇腹を覆う馬具の装飾の豪華さから、この馬は貴人の馬であることが分かる。

江戸時代において、馬は人間の生活に深く関わりのある動物であった。武家にとっては軍事用であり、街道交通においては貨客を運ぶ運搬用として、また農村においては耕作にも用いられた。その他、神社では神として奉納され、大事に飼われた。

98番

歌川芳盛
五ヶ国之内 ヲロシヤ
1860年

幕末、横浜港の開港後に大量に刊行された横浜絵の一つ。題名の「五ヶ国」とは、安政五か国条約を締結した、アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスのこと。各国の外国人と、コマ絵に各国の船を描いたシリーズである。本図はこのうち、「ヲロシヤ」を描く。当時、日本ではロシアのことをこのように呼んだ。

図には馬に乗ったロシア人を描く。高く大きな鼻やあごひげが、その特徴をとらえていよう。服装から見ると、商人などではなく、将官のようである。高い円筒形の帽子には、ロシア帝国の紋章「双頭の鷲」がデザインされている。図中には「横浜ヨリ一萬四千三百里」と記されており、約56,000キロメートルに相当する。実際の値とは異なるが、横浜から帝都サンクトペテルブルクまでの距離を示している。コマ絵にはロシア船が描かれている。

99番

セクション3

ソウルフード

葛飾北斎

春興五十三駄之内 藤枝

1804年

東海道を藤枝宿から島田宿へ行く途中にある瀬戸村（現在の静岡県藤枝市）では、名物の染飯(そめいい)が売られていた。染飯とはクチナシで黄色に染めた強飯で、これをすり潰して小判形などに薄く延ばして乾燥したものが街道の茶店で売られていた。クチナシは漢方薬として解熱・止血・鎮痛・利尿・消炎などの効果があり、また見た目の鮮やかさから旅人に重宝された。

図は、「藤枝本町瀬戸染飯」と書かれた看板を掛けた店頭で、美しい女性二人が台の上に載った丸型の染飯を売る様子が描かれる。本図では退色が見られるが、元は黄色で摺られていた。その横にはクチナシの赤い実が見える。座敷の竈には蒸籠を乗せた釜があるが、客が買った染飯をその都度蒸し返して柏の葉に包んで提供したと言われている。この地を訪れた小林一茶は「染飯や我々しきが青柏」と、染飯の黄色と柏の葉の緑色が見せる色彩の対比を句に詠み入れている。

106番

葛飾北斎

東海道五十三次 絵本駅路鈴 石薬師・赤坂

1810年頃

東海道の石薬師宿（現在の三重県鈴鹿市）の地名は、薬師如来像を本尊とする石薬師寺に由来する。旅人が手をかざして見るのは、街道の右手にある石薬師寺の山門ではなく、茶店の店頭に置かれた「うなぎ」の行灯看板。「牛若鞭桜」とあるのは、源頼朝の弟範頼が桜の鞭を地面に刺したところ芽吹いたという伝説の桜である。同じく頼朝の弟牛若丸（義経の幼名）と誤ってこのように呼ばれた。

赤坂（現在の愛知県豊川市）の図は、茶屋で休憩する旅の男女を描く。看板の「うどん」は饅頭（うどん）のこと。奈良時代に中国から伝わった小麦粉製の唐菓子「饅頭（こんとん）」から転じて、「饅頭（うどん・うどん）」となったという。平安・鎌倉時代には点心として発達し、江戸初期の料理書『料理物語』には現在とほとんど変わらない製法が紹介される。赤坂宿のある三河地方では平打ち麺が有名で、産地に因んで「芋川（いもかわ）」と呼ばれた。江戸では訛って「ひもかわ」と呼ばれ、尾張名古屋ではきしめんと呼ばれた。

107番a, b

歌川国貞（三代豊国）
神無月はつ雪のそうか
1815 - 18年頃

題名の「神無月」は陰暦十月のこと。「そうか」は総嫁・惣嫁と書き、夜鷹の上方での呼称である。夜鷹は路傍で客を引く最下級の娼婦である。突然の初雪に冷えた体を温めようと、蕎麦売りの屋台に駆けこむ夜鷹たち。夜の町を流して歩く屋台蕎麦屋は、江戸では夜鷹蕎麦と呼ばれ、屋台に風鈴をつけて鳴らしながら売り歩いたため、風鈴蕎麦とも呼ばれた。上方では夜鳴き蕎麦と呼ばれた。

右図の三人の夜鷹は、素足のままだったり褌袍（どてら）を着込んだりと、粗末な普段着のまま飛び出してきた様子がかがえる。中図は先客の二人で、手拭いを吹流しに被った夜鷹はしゃがんで蕎麦をすすり、袖なし半纏の夜鷹は手拭いを姉さん被りにして蛇の目傘を差す。左図では、結髪に赤い縮緬をかけた娘風の夜鷹が食べ終わった丼を屋台の店主に渡す。傍らの、切り前髪に垂らし髪を軽く結んだ伝法肌の夜鷹は、雪駄（せった）直しという街頭で履物の破損を直す者に鼻緒の修理をしてもらっているところ。

110番

歌川国貞（三代豊国）
古今名婦伝 巴卸前
1859年

幼子に菓子を食べさせてじっとさせ、その隙に髪を剃る母親。このように耳の上と後頭部にだけ毛を残して剃ったさまを「奴頭（やっこあたま）」といい、江戸時代の幼児の代表的な髪型であった。食べているのは、南蛮菓子のボーロ、もしくはカルメラであろうか。いずれも、室町時代末期にポルトガルから伝わった焼き菓子である。皿の上にも色とりどりのお菓子が並ぶ。こちらは、落雁など干菓子の類、あるいは有平糖（あるへいとう）のような飴細工にも見えよう。

子どもの髪型やお菓子は江戸時代風に描かれているが、詞書にある通り、母親は平安時代末期武将木曾義仲の愛妾巴（ともえ）御前、幼子は和田義盛の子朝比奈三郎義秀である。巴御前は義仲に従い、各地に転戦して功をたてた。義仲が討たれたあと、義盛は巴御前の武勇に感心して妻として迎え、朝比奈をもうけたとされる。しかしながら、史実を伝えるものかは定かではなく、男勝りの巴御前と怪力無双の朝比奈を結びつけた俗説であろうともいわれている。

114番

歌川国貞（三代豊国）

花遊びの図

1820年頃

春爛漫の池泉庭園で遊宴の準備にいそしむ女性たち。小舟の浮かぶ池の畔では、手拭いを姉さん被りにした二人が田楽豆腐を作っている。田楽豆腐は長方形に切った豆腐を串に刺し、砂糖・味醂などを加えた練り味噌を塗って焼いたもので、田楽法師が高足（たかあし）という横木をつけた棒に乗って躍る姿に似ているところからこのように呼ばれた。

右の女性は豆腐に平串を刺すところ。上方では二股の串を使った。傍らの蓋付き陶器に、特製の練り味噌が入っているのであろう。江戸では赤味噌を用い、木の芽や練り辛子を上に乗せた。上方では白味噌を用い、木の芽はすって混ぜた。中央の女性は焼き担当。左の若い女性が黒塗りの田楽箱を持ってきた。邸内でも忙しそうに膳を運ぶ姿が見える。奈良時代に中国から日本に伝わった豆腐は次第に調理法が発展し、室町時代すでに田楽豆腐が食されていたと記録される。江戸時代中期には、真崎 稻荷の境内に田楽茶屋がいくつも立ち並び、繁盛していた。

111番

歌川国芳

当盛江戸鹿子 永代橋ノ景

1833-35年頃

料理屋の仲居が料理を二階に運ぶ。膳の上には、深鉢・縁高・碗・大皿が載る。これらは口取肴といい、甘煮などを盛り合わせて吸い物とともに饗宴のはじめに出される料理である。江戸時代において、料理屋と呼ばれる店は、会席料理などを出す高級店で、現在の料亭に相当する。飲食だけでなく、書画会など社交の場としても活用され、極上の料理はもちろんのこと、座敷や庭に至るまで趣向を凝らした。また、高樓の眺望を誇ったり、浴室を設けたりする店もあった。

「永代橋ノ景」と題されたコマ絵には、永代橋の欄干と隅田川の河口にある佃島が描かれる。本絵は永代橋付近にあった料理屋を意図しているようか。永代橋東岸の深川は富岡八幡の門前町として栄え、料理屋が軒を並べた。一方、西岸の靈巖島辺りも名店がいくつかあり、どちらとも言い難い。仲居の帯や帯から下げた手拭い（あるいは前垂れか）には、「津国」「岩」など、この人物を示すような文字が見え、入銀（出資）による制作をうかがわせる。

124番

初代歌川広重
東海道五十三次 鞠子 名物茶屋
1853年

東海道丸子（鞠子とも）宿は、府中と岡部の間にあり、宇津ノ谷峠を控えた宿場である。名物はとろろ汁。すった自然薯を出汁と味噌で溶き、これを麦飯や白飯にかけて食べる。図は街道沿いの茶店を描く。旅人がかきこむようにして食べているのが、とろろ汁であろう。十返舎一九作の滑稽本『東海道中膝栗毛』で、弥次郎兵衛と喜多八もここでとろろ汁を食べようと茶店に入るが、店主と女房が喧嘩してとろろをぶちまけてしまい、食べ損ねてしまった。

店頭の立看板には「名ぶつとろゝ汁」、掛行灯には「御ちやつけ」、明かり障子には「御茶漬」「酒さかな」の文字が見え、とろろ汁以外に茶漬や酒肴を提供していることが分かる。もう一人の旅人は、銚釐(ちろり)で温めた酒を飲んでいる。幼子を背負った店のおかみさんが食べ物運んできた。店内に吊るされた魚は、往来を往く漁夫が捕まえてきたのだろうか。梅の白い花や、薄ピンクにぼかし下げられた空の色から、早春の雰囲気が伝わってくるようだ。

118番

歌川国貞（三代豊国）
伎踊初狂宴之図
1854年

「伎踊初（おどりぞめ）」とは、歌舞伎の世界で、正月のはじめに踊りの師匠が弟子を集めて催す踊り、あるいは初芝居を祝して子役を舞台に上げて躍らせることである。本図が制作された1854（安政元）年は、8月に若手の人気役者八代目市川団十郎の自死、11月に浅草聖天町より出火のため江戸三座の類焼、うち河原崎座全焼など、歌舞伎界では暗いニュースが続いた。当代きっての人気役者たちが集い、酒を酌み交わしながら新春を祝うという情景を描くことで、明るい新年への期待を込めたのであろう。

祝い膳には「めでたい」に通じる鯛の尾頭付き。姿焼き、あるいは活け造りであろうか。画面左では、曾我五郎に扮した三代目市村羽左衛門、舞鶴に扮した初代沢村由次郎が、初春狂言でおなじみの曾我物の舞踊「草摺引」を披露する。いずれも幼くして歌舞伎界で活躍し、名子役として人気を博していた。他の役者も、舞台さながらツケを打ったり、三味線を弾いたりして場を盛り上げている。

113番

歌川国貞（三代豊国）

名代三升あめ

1819年

1819（文政2）年上演の「お染久松色読販」より、七代目市川団十郎の三升飴売り成田屋七兵衛と五代目瀬川菊之丞の女房おむら。「名代三升あめ」と記した担ぎ屋台を持ちながら、夫婦で売り歩く様子が描かれている。桶の中には小さく丸められた白い飴が見える。屋根に吊るされた袋は飴を詰める袋。屋号の「三升」と三升の紋は、団十郎の定紋からとっている。

役名の「七兵衛」は、飴売り七兵衛に由来するのであろう。江戸時代中期に露店や歩き売りの飴売りが出現するなか、江戸浅草の七兵衛という者が千歳飴という名で売り出したものが、七五三の千歳飴の起源といわれている。

飴売りは、唐人などの奇抜な格好をして人目を引き、鉦やチャルメラを鳴らしたり、口上を述べたりしながら市中を売り歩いた。雨が降ると飴がだめになってしまうので、傘を差す者が多く、場合によっては急いで店じまいする。また、飴細工といって客のリクエストに応じて、鳥や動物、果物のなどの形に作る飴も登場した。

127番

歌川国芳

源氏雲浮世画合 早蕨

1846年頃

仙台の伊達騒動を鎌倉の世界に脚色した歌舞伎狂言「伽羅先代萩（めいぼくせんだいは）」より「御殿の場」。乳母政岡は若君鶴千代を悪臣から守るため、奥御殿で男を遠ざけ、毒殺を警戒して自炊しながら、幼い我が子の千松とともに仕えた。悪人方に加担する山名宗全の妻栄御前が持参した毒入り菓子を、千松は若君に替わって食べ、陰謀発覚を恐れた八汐になぶり殺しにされる。幼いながらも健気に若君を守ろうとする実子を、犠牲にしてまで忠義を貫く政岡。その顔には苦悩の表情が浮かぶ。

箱に詰められた色とりどりのお菓子は有平糖（あるへいとう）であろうか。有平糖は安土桃山時代に伝来した南蛮菓子で、砂糖に飴を加えて煮詰めて着色し、棒状、あるいは花や果実などいろいろな形に細工したお菓子である。千松が口にするのは、蕨の形のお菓子。詞書は山菜の蕨に関するうんちくで、焼き豆腐の添え物や茶漬けの具として食されることや、蕨餅は東海道日坂宿の名物であることなどが語られる。

123番

歌川国芳
山海名産尽 信濃蕎麦
1831-32年頃

煙立つ浅間山を背に、木曾街道を旅人が行く。上州との国境碓氷峠（うすいとうげ）を超えると信州に入る。茶店の看板には「信州名物二六」の文字が見える。「二六」とは二六蕎麦のこと。信州は言わずと知れた蕎麦の名産地で、街道沿いの茶店では挽きたて打ちたての蕎麦を供した。

「二六」と数字で表されるのは、蕎麦の値段のこと。2かける6で、1杯12文という意味である。一般的には「二八」で16文が多いが、これは信州だから安いというわけではない。江戸時代中期に著された『蕎麦全書』には、江戸市中にも二六蕎麦の店が確認される。また、初代広重の錦絵「木曾街道六拾九次関ヶ原」には、「三五」の看板を掲げた店も見られ、この場合は15文。なお、幕末には物価高騰のため、20文、さらには24文に値上げされた。

「二八」について、蕎麦粉8割に対して小麦粉2割を混ぜて製したとする説も見受けられるが、「二八うどん」のように小麦粉だけで作るうどんや、「二六」「三五」など合わせて10割にならないものにも使われていたことを考慮すると、値段説の方が有力とされている。

125番

初代歌川広重
浄るりまち繁花の図 鶯餅
1852年

前図と同シリーズ。画面右上には、「もち長らや鶯餅」の看板を掛けた店が描かれる。若い娘が店番をしているところに、浪人風の若い男がやってきた。「昔語黄鳥墳（むかしがたりうぐいすづか）」の主人公佐々木源之助と、長柄（ながら）の長者の娘梅枝（うめがえ）である。梅枝が可愛がっている鶯を助けた縁で、源之助は長者の婿となる。図では本物の鶯ではなく、鶯餅が二人の縁を結ぶ。餡を包んだ餅に青きな粉をまぶし、両端を尖らせ、色と形を鶯に似せたお菓子である。

鶯を襲うはずの鷹は、魚売りの鯉の切り身を襲った。これは「夏祭浪花鑑」の魚売り団七九郎兵衛である。夏祭の宵、団七が舅義平次をめった斬りにして殺害する「長町裏の場」が有名であるが、斬ったのは鯉の切り身。皿から鯉を落として大騒ぎする義平次。

画面中左は、「心中二つ腹帯」や「心中宵庚申」の主人公八百屋半兵衛。武家出身で八百屋の養子となった半兵衛が、義母への義理立てと女房お千代への愛情の

板挟みに苦しんだ末、お千代と心中したという巷説に取材する。大根、蓮根、芋、葉生姜など新鮮な野菜が並ぶ。大根を買うのは、半兵衛の義母。

120番

初代歌川広重

浄るりまち繁花の図 かばやき

1852年

小店や露天商で賑わう街角を描くが、実は人形浄瑠璃や歌舞伎の登場人物の戯画となっている。画面中央左に、「瀬田前かばやき」とあるのは鰻のかば焼き屋で、近江国瀬田（現在の滋賀県大津市）は鰻の名産地として知られた。鰻を焼くおかみさんの傍らで、亭主がさばこうとした鰻が暴れる。「傾城反魂香（けいせいはんごんこう）」で、又平と女房おとくが師匠土佐光信の見舞いに持参したのが瀬田のうなぎである。なお看板は、又平が自害覚悟で自画像を描いた手水鉢。魂込めて裏側から描いた自画像が、厚い石を通り抜け表側に現れた。

その右側の露店は、「石川屋丸あげ」。店主を務める石川五右衛門は、安土桃山時代の大盗賊で、京都三条河原で釜煎りの刑に処されたという。江戸時代に入ると、義賊あるいは天下を狙う大盗賊として、数々の人形浄瑠璃や歌舞伎の題材になる。なかには、我が子とともに捕えられて大釜の油で焼かれるという演出もみられた。

119番

歌川芳豊

アメリカ人遊里屋図

1860年

横浜が開港された1859（安政6）年、港埼（みよぎき）遊郭が誕生した。高級妓楼やお手頃な局見世などの遊女屋、遊客を案内する引手茶屋などが軒を連ねた。なかでもひとときわ豪奢を誇ったのは遊女屋岩亀楼（がんきろう）で、吹き抜けの内部には橋を渡した中庭を作り、ガラスのシャンデリアなど室内の装飾に趣向を凝らした。題名に「遊里屋」とあるが、図中の花頭窓の下を飾る唐紙に扇の意匠が施されていることから、ここは扇の間で知られた岩亀楼であろうと推測される。傍らの禿は、襟にフリルのような布をつけている。

二人のアメリカ人は、使節と水夫であろうか。一人が啜えたパイプに、もう一人がマッチで火をつける。この頃、マッチはまだ日本では作られておらず、珍しい舶来品として描き入れたのであろう。座敷や膳ではなく、椅子やテーブルが置か

れている。また、食卓には箸や盃の代わりに、レンゲや高杯が用意されている。居留地に住む外国人をもてなすために作られた港崎遊郭では、西洋人がくつろぐための細やかな配慮がなされていたことがわかる。

129番

月岡芳年
風俗三十二相 むまさう 嘉永年間女郎の風俗
1888年

「むまさう」とは、美味そうの意。遊女がおいしそうに食べているのは海老の天麩羅。蕎麦猪口に入っているのは天つゆであろう。

天麩羅の名前については、天明（1781-89）の頃、大坂から芸者と駆け落ちして江戸へやってきた利助というものが、上方で「つけ揚げ」と呼ばれる魚介に衣をつけて揚げたものを江戸で売り出す際に、戯作者の山東京伝に名付けを頼んだところ、天竺浪人（流浪人の別称）がぶらりと江戸へ来て売るから「天ぷら」と名付けという逸話が残る。また、「麩」は小麦粉から作られ、「羅」は「うすもの」と読むことから、この漢字をあてたそうだ。

はじめは屋台で売られ、串揚げにしたものをその場で食べたり、包んで持って帰ったりした。のちに店内で食べさせる店も登場した。具材は江戸前の鯛、穴子、芝海老、小肌、貝柱、スルメなどで、揚げ油は主にごま油が用いられた。野菜は天麩羅とは言わず、揚げ物と呼んだ。ちなみに上方で「てんぷら」というと、魚のすり身を揚げたものを指す。

104番

ガーデニング

歌川国貞（三代豊国）
勝景鏡 観音
1820年代初期

国貞は文政初年よりコマ絵に名所、本図に美人という揃物を多く出しており、コマ絵に洋風の江戸名所を、その下に美人の全身像を配した「勝景鏡」もその流れに沿ったものであろう。「観音」「上野」「不忍」「駿河町」「日本橋」「両国」「堺町」「吉原」「三廻」「高縄」の10図が知られている。

掲載作品のコマ絵は「観音」の文字から浅草寺の本堂を西側から描いたものとわかる。当時の浅草寺境内は寺社仏閣がひしめく名所で、参道は参拝客目当ての商売で賑わった。鉢植えも例外ではなく連日植木市が開かれていた。

本図にて手ぬぐいを肩に掛け、裾よけに前掛けというラフな格好で洗濯物を干すのは年増の女性。一見格子柄の着物を着ているようだが、素肌に掛けるだけという危なっかしい構図である。

井戸端にはウリとエンドウが描かれており、よく見ると実もつけている。一見、自生しているだけにも見えるが、画面右端には蔓を巻きつけるための支柱があることから、人の手が加わっているとわかる。

134番

歌川国貞（三代豊国）

春宵梅ノ宴

1849-51年頃

梅の宴とあるように、庭に満開を迎えた梅、椿、水仙、そして画面右の棚には、梅、南天、五葉の松、松葉蘭、福寿草の鉢植えという高級かつ新春を寿ぐラインナップが揃う。鉢はいずれも染付や釉で装飾されているが、素焼きの植木鉢と異なりこうした装飾ものの鉢は、植えられる植物と同様に高値で取引されていた。さらに、植木棚も植木屋の簡易な棚とは異なる、竹で土台を補強した鑑賞用のこしらえで、当時贅沢品であった口ウソクや、ガラス製の風覆いなどからも高級感あふれる梅見の会を思わせる。

夜に梅を見せる植木屋が実在したのかは不確かながら、大規模な植木屋の中には、庭をテーマパークのように開放する者もあり、そうした一幕を描くのかも知れない。来客も多様で、画面右の二人は芸者もしくは粋筋の装い、中央に立つ女性は島田で振袖、左の二人は若い娘と付き添いの年増となっており、なかなか同座することはなさそうな取り合わせだが、当時の風俗まで楽しめる作品である。

133番

歌川国貞（三代豊国）

松竹梅名残島台

1851年

1851(嘉永4)年6月、市村座にて上演された「松竹梅名残島台」に取材した図で、画面右より五代目市村竹之丞、初代坂東しうか、八代目市川團十郎が描かれているが、実際には團十郎は病気で出勤できず市川九蔵が代役に立ったので、この絵は興行前に描かれたとわかる。この興行は、行商の朝顔売りを演じる竹之丞が地方興行に出る前のお名残として催された。朝顔は変種が生まれやすく、稀少性や偶然性が園芸家の心をくすぐった。変化朝顔に特化した品評会が開催され、版本が出され、種子が高額で取引されるなど江戸期を通じて幾度かブームがあった。この絵が描かれた嘉永期には、江戸、大坂を中心としつつ関東近郊に至るまで、植木屋が珍しさを競って積極的に変化朝顔を売り出し、高額商品も登場した。この絵にも、青い絞り模様の変化朝顔が売り物として並んでいる。なお、浮世絵の中で売られる朝顔の姿もある程度定型化していたようで、江戸の場合には、絵にもあるように、水はけの良い素焼きの鉢に、1株ずつ分けて支柱を添えるという形が多く見られる。

136番

歌川国芳

見たて五行 土 ところなつ

1851 - 52年頃

柳亭種彦作、歌川国貞が挿絵を担当した『偽紫田舎源氏』は、『源氏物語』の時代を室町時代に、主人公光源氏を足利光氏に置き換えたパロディーで、1829(文政12)年の刊行より人気を博し、1842(天保13)年まで続くロングセラーとなった。流行を受けて浮世絵でも、同書の挿絵や場面に基づく「源氏絵」が登場した。この絵の題名「ところなつ」はナデシコの古名であるため、『偽紫田舎源氏』三五編の「常夏」に基づいた絵だと当時の人には分かった。画面右側の男性は光氏、左端にいる振袖を着た女性は玉鬘を翻案した玉葛となっており、背景にはナデシコの鉢植えが置かれている。植木鉢に着目すると、いずれも装飾されており、持ちやすいように鍔も付いている。従来の木製や火鉢などに穴をあけた転用品から、このように釉をかけて装飾した植木鉢が登場するのは、園芸ブームが本格化した18世紀後半以降といわれ、江戸では瀬戸産が多く使われた。見た目は美しいが、釉薬がかかっているために通気性や水はけが悪く、朝顔などは素焼きの鉢で育て、観賞用に釉のかかった鉢に移したと考えるのが現実的であろう。

138番

セクション4

季節の祭り

歌川国芳

築地御門跡之図 桜

1853年

「嘘を築地の御門跡（うそをつきじのごもんせき）」という江戸の地口で知られる築地本願寺は、1827（文政10）年に出版された江戸の行楽案内書『江戸名所花暦』にもその名を連ねる桜の名所であった。現在日本で見る桜の大半はソメイヨシノだが、これは明治以降になって急速に広がった品種で、江戸時代には八重ザクラや彼岸サクラ、山サクラ等が主流であった。これらの桜は種類によって開花時期が異なるため、春分の日から4月下旬にかけて長く花見を楽しむことができた。築地本願寺は当初1617年に西本願寺の別院として浅草御門南の横山町に建立されたが、明暦の大火（1657）で本堂を焼失したのち1679年になって築地に再建された。本堂を正面にした参道の左右には桜並木があり、本願寺の大屋根を斜めから見た構図で描かれている。本作の3年後にあたる1856（安政3）年8月の台風で被災し、ここに描かれた本堂は失われた。

142番

歌川国貞（三代豊国）

三ツ会姫ひみな遊びノ図

1861年

3月3日は五節供のうちの上巳の節句（桃の節供）である。女子の健やかな成長を祈る年中行事で、平安時代には紙製の人形を川などに流して穢れを払う「流し雛」が行われた。江戸時代初期は紙雛による簡素な人形飾りであったが、中期頃から次第に華美になり大名や武家子女の嫁入り道具として用いる際は、人形の道具類に蒔絵などの凝った装飾が施された。幕府の儉約政策により雛人形の大きさや道具類蒔絵禁止など度々制限が加えられたが、次第に構成人数が増え規模が拡大していく。1832（天保3）年の『江戸名所図絵』によると、日本橋の十軒店には人形を扱う店が集まり、桃の節供が近づくると内裏雛・裸人形・手道具などの店が軒を連ね大勢の客で賑わった。本作品は、柳亭種彦作の合巻『修紫田舎源氏』に登場する主人公・光氏を、本編のあらすじとは関係なく登場させた「源氏絵」と呼ばれるもの。豪華な雛飾りと三ツ会姫や官女たちの艶やかな衣裳、加えて庭で咲き誇る桃の花で構成された本図は目も眩む豪華絢爛なファンタジーの世界を描いている。

144番

楊洲周延

江戸砂子年中行事 端午之図

1885年

端午の節供は本来5月最初の午の日に行われ、別名「菖蒲の節供」とも呼ばれた。菖蒲と蓬を束ねて軒先に挿す軒菖蒲や鯉幟をはじめ、中央では武家の少年たちが菖蒲刀を腰にさし、先を太く編んだ菖蒲の葉で地面を打つ「菖蒲打（しょうぶうち）」をしている。三つ葉葵の紋を付け高座に座る少年は徳川家ゆかりの幼君であろうか、既に過去の風俗となりつつある江戸時代の様子を描いている。端午の節句は、平安時代には菖蒲で作った鬘を冠につけ大内裏を訪れ、天皇から薬玉を賜る邪気払いの行事であった。武家が台頭すると、菖蒲が武道・武勇を重んじることを意味する「尚武（しょうぶ）」に通じることから、屋内に兜や武者人形を飾り男児の立身出世・武運長久を祈る行事へと転じた。江戸中期にはこうした習慣が商人にも広がり、登竜門の故事にならって鯉を象った吹き流しを幟の竿頭に掲げるようになったとされる。1839（天保9）年の時点では、鯉幟は「東都の風俗なりといへり」（『東都歳時記』）とあり、種類も黒色の真鯉のみであった。庭に立てられた多くの幟の中には、菖蒲と同様に邪気を祓うとされた鍾馗を描いた幟も見られる。

145番

肉筆画

肉筆画（浮世絵版画の中でも描いたもの）は紙や絹に筆や絵の具を使って描かれた。ほとんどのこのジャンルの作品は浮世絵の下絵を描く絵師によって作成された。今日この用語は16世紀後半から17世紀初頭の筆で描かれた風俗画に広く使われる。また、19世紀後半から20世紀初頭の日本画家による近代の作品も示す。

元廣

美人と猫

1830 - 44年

巻物に墨と絵の具

148番

菊川英山
犬を抱いた子ども
1810年頃
巻物に墨と絵の具

155番

三畠上龍
桜下美人
1820 - 1844年
絹の巻物に墨と絵の具

152番

三畠上龍
犬と美人
1830 - 44年
絹の巻物に墨と絵の具

149番

静観空間

初代歌川広重

東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景

1833年頃

誰もが一度は目にしたことがある有名な浮世絵。広重はその生涯で、少なくとも15種類以上の東海道を描き、しばしば「東海道の絵師」とも言われるが、これは初の、そして最も著名な東海道作品である。現在は、東京オリンピックのために作られた首都高速道路がすっかり覆ってしまっている日本橋のかつての姿。日本橋は五街道の起点で、南へ発つと東海道、北へ旅立つと中山道の旅が始まる。画面両端に描かれた木戸を入り、橋を真正面に望む斬新な構図。副題は「朝之景」。橋上には参勤交代の大名行列が朝早く出立する様子が描かれる。一方、向こう岸にあった魚河岸から仕入れた江戸前の鮮魚を天秤棒で担いではこぶ行商人たち。江戸の町では、犬たちも早起き。おこぼれでも狙っているところか。紅、紫、青に描き分けた空の描写から、大江戸の町の営みが、これから始まることを伝えてくれる。

8番